

水 土 里 レ ポ ー ト

投稿月日	2017/5/15
タイトル	「田んぼの学校」那須苗取り田植唄保存会による入校式及び種まき
水土里レポーター名	水土里ネット那須野ヶ原 参事 星野 恵美子

平成29年4月23日（日）、那須苗取り田植唄保存会による「田んぼの学校」の入校式及び種まきが行われました。

那須苗取り田植唄保存会は、昭和30年代まで続いた馬と手作業による田植えの姿や、作業中に歌われたとされる「田植え唄・苗取唄、稲刈唄」を後世に残すため集まった地域の有志が集結し、平成4年10月に設立。その後、平成15年度に水土里ネット那須野ヶ原（那須野ヶ原土地改良区連合）が推進本部となり「田んぼの学校」～米作り自然親子・体験塾～とし正式に立ち上げ、農作業体験や地域との交流など活発な活動が現在まで行われています。

今年度も新一年生13名を加え、33名の子供たちが参加し、那須苗取り田植唄保存会の方々、学校関係者、地元高校生のボランティア、保護者等、総勢約70名での開校式を行いました。

開校式では、那須苗取り田植唄保存会が継承活動を行っている「田植え唄」を披露していただきました。御年97歳の歌い手さんから小学生まで、みんなで歌いました。開校式後種まき作業を始め、初めて体験する一年生を中心に、高校生のボランティアの方が補助に入り、指導者の指示通り作業を進めました。一つ一つ、丁寧に重ならないように真剣に蒔いている子や、ぱらぱらと手際良く蒔く子、苗箱の外に落ちた種を一粒残らず拾い「もったいないからね」と大切に蒔く子、種籾を手のひらにのせ、「芽が出てる！」と、感激している子もいました。

次に、蒔いた種籾の上に水をかける作業です。種籾が動かないように、水圧を調整しながら水を蒔いていきます。水まき作業中の合間に、かけた水が傾斜に添って流れて行く様子を追いかけている子ども達に目がとまり、自分の幼少期に、土に溝を掘り、上の方から水を流して遊んだ記憶が思い出され、その姿に懐かしさを感じました。時代は進歩しても、子ども達の遊びや興味はいつの時代も変わらないのです。だからこそ、農機具が発達し機械化した現在の農作業しか知らない子供達に、先人の苦労や手作業による米作りなど、一人でも多くの子供達に経験してほしいと思います。これらの活動を遊びながら楽しんで継続することが、将来、日本の農業農村を支え、守る事に繋がるとても重要な取り組みではないでしょうか。

その後の土を被せる作業は、土に触れることが大好きな子供達にとって「まだかな」と、指示が出るまで「さらさらの土」「ふかふかの土」と思い思いの感想を言いながら待っていました。そして、あっという間に土を被せる作業が終了し、親子仲良く苗箱を持ちハウスへ運び、今日の作業は終わりました。

これから約一年を通し、「田んぼの学校」の活動が続きます。私たちはこれらの活動を通し、疏水や環境の事、更には農業水利施設の役割や多面的な機能など農業に関わる全般に亘り、興味を持ってもらえるよう発信していけたらと思います。



「田植唄」を披露！



丁寧に種籾を蒔いています！